

# 支配装置としての「科挙」

劉 恩慈 Lau Yan Chee

京都大学 大学院

## はじめに

科挙というのは試験「科」目を以て、有能な人材を朝廷に「挙」げる意味であり、旧中国の官僚任用試験制度であった。従来、科挙は専ら制度史として研究されてきた。また、1950と60年代に、アメリカの社会学者は中国伝統社会の社会移動の状況を調べるため、科挙をその手がかりとして研究してきた。が、本発表は、中国伝統社会の支配構造の文脈において、科挙を文人の支配体制を再生産するメカニズムとしてとらえようとする。それによって、19世紀後半に中国の近代化を沈滞する原因が明らかになると考える。

## 1. 科挙の沿革

科挙は、応募者が特定分野の科目を受験し、それを合格すれば、それに準ずる学位が授与されると共に、その学位に相応する官職に着く資格が与えられる制度であった。応募者は自ら科挙に参加し、自分の能力を試すので、科挙は自薦本位の選抜制度であるといえる。それは7世紀頃の唐朝に制度化され、今世紀の初め、つまり、清朝末期の1904年までに、ほぼ中断されたことなく、行われ続いてきた。科挙以前に、「九品官人法」などのような、他人からの評価に基づく他薦本位の選抜方法が採用されていた。

科挙は主に郷試と会試と殿試の3段階の試験から構成される。各試験の合格者が挙人と貢士と進士の順に学位を授与される。郷試は地方レベルの試験であり、各府県の首府に行われる。次に、会試は各地方の郷試の合格者を集め、国の首都で行われる。最後の殿試は、会試を勝ち抜けた者が宮殿の中に受験する。皇帝は自ら試験を監督する。

各試験は3年1回に「貢院」という科挙専用の試験場で行われる。科挙の受験資格は官学の生徒に限られていた。官学の生徒になるには、極一部の人を除き、出身や年齢を問わず、特に制限がなかった。が、官学に定員があるので、それに入るため、まず、入学試験を通らなければならなかった。それ故、本来、学校と科挙は互いに独立した存在であったが、次第に、学校は科挙に従属する形になり、官学の入学試験は科挙の一連の試験の

延長となってしまった。また、科挙の試験内容は儒教の古典である四書五経に準ずるものであった。

## 2. 支配構造における科挙

中国社会の特質の1つは、支配階層と被支配階層の間に、非常に流動的であった。前者は権力者の皇帝と貴族及び知識人の文人官僚であり、後者は士農工商に代表される百姓であった。社会的な地位を決めるのは、財産のはかに、教養が非常に重要であった。文人たる知識を見に付けるには、経済的な基盤が重要であるが、科挙を通して支配階層に入るには、教養が絶対的な条件であったといえる。

中国の歴史を見ると、新王朝の権力者は大体百姓出身の者か外族であった。いずれも兵術に精通する者であるが、広大な中国を統治するには、文人官僚の手を借りなければならなかった。が、権力者と文人からなる支配階層は常に一枚岩ではなかった。互いに相手の勢力増大を見守りながら、自らの権力基盤を強めていくのであった。科挙はそれにどのような役割を果たしたかと、次に考えていきたい。

### 2.1 権力者に対する科挙の重要性

唐の皇帝は前の南北朝の分裂時代を終え、中央集権的な統一国家を建設するに、直接に民間から皇帝に忠誠する知識人を抜擢しなければならなかった。前の他薦本位の「九品官人法」は縁故主義の弊害を生じ、貴族勢力を増大させる恐れがあるからであった。それ故、客観的な筆記試験による科挙が実施されるようになった。つまり、科挙を行うことにより、国を治める人材を集めるほか、貴族に対抗する文人官僚の勢力を形成させるわけであった。が、皇帝はそれと同じように、科挙を以て、文人官僚の勢力増大を抑えることができた。

科挙は文人官僚にとって、新人補充の唯一の源泉であった。皇帝は科挙の施行回数と合格者の定員数を操作することによって、朝廷内の文人官僚の勢力を制御できるわけであった。また、文人官

僚の中に、買官制度によって、官職に着いた者がいた。それはいわゆる「雑途」の出身であり、「正途」である科挙の出身者と対抗関係にあった。皇帝はその党派の対立を利用して官僚を牽制するわけであった。

皇帝は科挙の試験内容を操作し、思想上の統制を図ることが可能となる。科挙を始めた唐朝に、科挙に秀才、明経、明字、進士及び明算など実学を含める試験科目があった。近代になってくると、科目の選択が少なくなり、明と清朝に文学を重んじる進士科しか行われなくなった。それは主に古典を暗記し、古代聖人の思想に沿って解答することが要求された。つまり、受験生の思想は古典に縛られ、独自の考えが抹殺されることになった。

中国伝統社会は中央集権的な支配体制にあったが、中央政府の権力が地方まで浸透できなかったのは実情である。それは、中国の領土が広く、交通が発達していなかったなどの理由があげられるが、特に、地方の氏族の勢力が極めて強かったのである。科挙は中央と地方との橋の役割を果たしていた。朝廷は地方のエリートを科挙に参加させ、中央に官職を与え、地方と直接に関係を結ぶのであった。もっと大切なのは、科挙は地方において、いわゆる「紳士」(GENTRY)という「半官半民」の地方支配階層を作ったのである。科挙に参加して、最後まで合格できなかった者は、朝廷に官職を与えられなかったが、知識人である故、一定の特権が与えられ、地方の指導役をするのであった。彼らの仕事は主に中央に派遣されてきた地方官の補佐役と、地元の人に朝廷の指令を伝えるところであった。

## 2.2 文人に対する科挙の重要性

文人はウェーバーによれば、もともと朝廷の占星師でした。彼らは文字に精通するので、国家行政にふさわしい人材であった。それ以来、国家の権力構造に入り、支配階級の地位を維持してきた。が、文人という支配的な社会地位が相続不可能なものである。文人になるには、それなりの知識と教養が必要となるからであった。しかし、文人にとって最も大きな脅威は皇帝と貴族や官宦の

結合である。その脅威を軽減するため、彼らの重んじる儒学を国の正統的な学問としなければならなかった。さらに、それを科挙の試験内容に組み込むことによって、あらゆる人は官僚になるに、必ず儒学の洗礼を受けなければならないことになる。それと同じに、その科挙を官僚になるに、最も正統的なルートにしなければならなかった。清朝においては、普通の文科挙のほか、武科挙や翻訳科挙や八旗科挙などが行われていたが、いずれも文科挙の地位に及ばなかった。つまり、貴族であれ、平民であれ、高級官僚になるには、一度、文科挙を通過しなければならないことになった。

## 3. まとめ

科挙は1400余年の間、王朝の更迭にも係わらず、行われ続いたのは、権力を握る皇帝と、知識を持つ文人との間に、共通の利害が見いだせるからであると考えられる。皇帝と文人は互いに科挙を以て自らの支配階層にある地位を維持してきたのである。

儒学は科挙と結合し、正統的な学問の地位を得た。しかし、19世紀に、西洋列強の渡来と共に、西洋の文化が中国に入ってきた。文学偏重の儒学だけで、当時の中国の劣勢を変えることができない認識が知識人の間にあったが、中国は積極的に西洋の実学を取り入れようとしなかった。それは、儒学が正統的な学問である上、官僚になる道は、西洋の実学にあらず、以前として儒学にあるのであった。清朝末期に、一度、洋学の科挙が行われたが、その合格者への待遇と地位が文科挙に遠く及ばなかったため、失敗に終わった。西洋の実学の地位をあげれば、相対的に文人官僚の持つ儒学の正統性が低くなり、文人自身の支配的な地位が危うくなるからであった。それは中国の近代化を阻害する原因の一つになると考えられる。科挙は本来、業績本位の官僚任用試験であったが、身分の枠を越え、全ての人に官職の門戸を開くという基本理念は欧米より遥かに早く定着した。しかし、科挙は正統的な学問である儒学と結合することにより、儒学がその正統性を失いつつある共に、1904年に廃止されることになった。🍎